

言語学、はじめの一步（2）

皆さんはどのような新年を迎えられましたでしょうか。人間は言葉無しでは生きて行けないと言っても過言ではないでしょう。その言葉を学問するのに、本稿が少しでもお役に立てばと思います。

さて本題に入る前に、前回ご紹介した本は読まれましたか。本の請求記号は804-Macですが、この804は「分類番号」と呼ばれる数字です。この数字には意味があり、804は言語についての論文や評論などを示しています。この番号に馴染みのない方は、まず本館の閲覧室で804の場所を見て下さい。同じような本が見つかりますよ。

Q：第1回目は「言語学とはどのような学問か？」というところで話が終わっていました。もう少し詳しくお聞かせ下さい。

A：はい。前回、言語の研究は紀元前から行われていたという話をしましたが、現在のように本格的に研究が始まったのは19世紀以降です。ヨーロッパで比較言語学という学問が確立されました。

Q：それはどのような研究ですか？

A：人間に親や兄弟、叔父、叔母など親族がいるように、言語にも親族関係があります。英語はフランス語やロシア語、インドの古典語であるサンスクリット語などと同じ世界最大の言語族であるインド・ヨーロッパ語族に属するわけですが、比較言語学では特にこのインド・ヨーロッパ語族に属する諸言語の特徴を比較することにより、いわば言語の家系図を作っていました。

Q：アメリカでは言語の研究はどのように行われてきたのでしょうか？

A：20世紀前半はアメリカ構造主義言語学が隆盛を極めました。アメリカ構造主義言語学は文字を持たないアメリカ先住民族の言語を調査することに端を発したこともあり、言語の実態を記述することを目的としていました。1950年代以降は米国マサチューセッツ工科大学のノーム・チョムスキー(Noam Chomsky)教授が提唱する生成文法理論が世界の言語学界を席卷しました。

Q：それはどうしてですか？

A：生成文法以前の言語学は個別言語の音・形態・文法などを「記述」することに力が注がれて

いました。しかし、チョムスキー教授は言語の仕組みは「説明」できるものであり、言語学は科学であることを示しました。

Q：チョムスキー教授は1987年来日された際、本学で講演をされましたね。

A：私が入学する以前のことで。当日の会場は熱気に包まれていたと伝え聞いています。生成文法理論は何度も修正を繰り返しながら現在も新しい枠組みで研究が進んでいます。

Q：言語学でも流行があるのでしょうか？

A：ありますね。生成文法に対する新たな潮流として1980年代から認知言語学が登場し、現在では生成文法を凌ぐ一大勢力になっています。

Q：認知言語学とはどのような学問ですか？

A：言語は人間の持つ一般的な認知能力を反映しているという考えに基づいています。つまり我々が外界の事物をどのように認識しているかが言語表現に表れるという考え方です。これにより生成文法では扱われてこなかったメタファー（比喩）の研究などが盛んに行われるようになりました。

Q：なるほど。では生成文法と認知言語学の入門書的なものを挙げていただけますか？

A：少し古いですが次の2冊を挙げておきます。

『生成文法の基礎』中村捷・金子義明・菊地朗著、研究社出版(1989年)と『認知言語学の基礎』河上誓作編著、研究社出版(1996年)です。タイトル通りいずれも基礎を学ぶには現在でも格好のテキストだと思います。認知言語学関連の書籍は和書・洋書を問わず特に2000年以降数多く出版されていますので、興味のある方は図書館で探してみてください。

今回取り上げた参考文献について

『生成文法の基礎』の請求記号は801.5-Seisで、本館の第一閲覧室と書庫に一冊ずつあります。『認知言語学の基礎』は801-Kawで、本館の地下書庫にあります。どちらも専門的な内容を織り込んでいます。少し力を込めて挑戦してみてください。

にゅうがく なおや

(大阪大学非常勤講師・英語学・英語史)

ふじい たつや (司書・係長・アジア関係図書館)